

皆様、春季大祭、そして、豊穰祈願祭おめでとうございます。

①之光教団の皆様には、常日頃、「会う、聞く、浄霊」や「想念の革正」の学びと実践に地道に取り組んでおられますことを、大変ありがたく思っております。

私は、今年一月、大阪のなにわ布教所で開催されました、大阪布教区信徒大会に出席させていただきましたが、地元の信徒の方々が集われる布教所で、皆様にお目にかかることができましたことを、何よりも嬉しく思いました。

と同時に、皆様の普段のありのままの率直なお姿に触れさせていただくことを通して、感じ、気づかせていただくことの中に、大切な学びがあると思わせていただきました。

また、先程、成井理事長より、決意と希望に満ちたご挨拶がありましたように、昨日、①之光教団の三年に一度の役員改選が完了し、引き続き、成井理事長を始めとする執行部のもとに、皆様が力強い前進を続けられることとなりました。

このことを私は、大変喜ばしく、また、頼もしく思いますとともに、常に謙虚に主神にお仕えしておられる明主様が私どものうちにおられ、私ども一人ひとりをご自身とひとつに結んでくださっていることに感謝し、その明主様のみ心に少しでも近づくべく、皆様と共に大いに進化し、成長させていただきたいと願っております。

さて、誠に恐れ多いことではありますが、私どもを創造された方は、唯一の神・主神であります。

その主神の創造の御目的は、ご自身の永遠の命を継承させる子をお生みになることでもあります。

その目的をもって、主神は、創造をお始めになる前の天国において、万物となるべき霊と共に、私ども人間となるべき霊、すなわち、魂と呼ばれる分霊^{わけみたま}を無数にお生みになりました。

そして、ご自身の目的意識のこもる息と共に、ご自身の永遠の命と意識を授けてくださり、私どもにメシア、すなわち、主神の子という立場をお与えくださいました。

その後、主神は、天国より、まず万物を地上にお遣わしになり、最後に私ども人間一人ひとりを地上にお遣わしてくださいました。

しかしながら、主神の創造の最終目的は、私どもを意識あるものとして地上に住ませ、地上で豊かに栄えさせることだけではありません。

全人類の先祖の綜合体であり、万物と一体である私どもを、主神は再び、創造の始まりの天国に迎え入れてくださろうとしておられます。

そして、私どもをご自身と共に天国に住ませ、地上と天国とが真の一つになった姿の地上天国を、一人ひとりの中に建設してくださろうとしておられます。

だからこそ、私どもは、天地万物一切が主神に属するもの、天国に属するものとして自分の意識に結ばれていることを認めるとともに、自らの意志をもって、すべてを携えて天国に立ち返らせていただきます、と主神に申し上げることができるのではないのでしょうか。

そして、主神の永遠の命を“もう一度新しく、お受けすることによって、自分に結ばれているすべてを甦らせ、主神の子たるメシアという立場を全うさせていただくことができるのではないのでしょうか。

なぜならば、メシアという立場は、特別な人間に対してのみ用意されたものではないからです。

誰であろうと、この世に生まれ出てくる前に、天国において、主神の子たるメシアという立場を賜っており、私どもには、その立場を全うする務めがあります。

この主神の子たるメシアという立場を全うされたのが、明主様であられます。

私どもと同様、地上に遣わされた明主様は、ご自身の中に主神が生きておられるという信仰に導かれ、全人類と共に、また、万物と共に、天国に立ち返られて、主神の永遠の命を“もう一度新しく、お受けになりました。ご自身の全身の細胞の隅々にまでお受けになりました。

このことは、主神のこの上ない喜びであり、栄光であると思います。

ですから、主神によって創造され、主神の子として新しくお生まれになった明主様の全身の細胞一つひとつは、そして、明主様に結ばれた私どもの全身の細胞一つひとつは、主神の子たるメシアが生まれたという喜びに満ち溢れているはずです。

だからこそ、明主様は、「メシヤが生まれた」あるいは、「新しく生まれる」というお言葉をもって、この重大な事実をご発表になり、主神の喜びが私ども信徒一人ひとりの意識の中心にあることを教えてくださったのではないのでしょうか。

主神は、明主様のうちに、ご自身の目的を全うされ、明主様を私どもの模範、あるいは、ひな型としてくださいました。

なぜならば、私どもも、明主様に結ばれたものとして、明主様と共にあるメシアの御名にあって、主神の子たるメシアという立場を全うすることができるように養い育ててくださるためです。

本日は、豊穰祈願祭が執り行われましたが、豊穰を誰よりも願っておられるのは、すべてを創造し、今も創造を続けておられる主神であります。

主神は、農作物の豊穰だけではなく、私ども自身の豊穰を何よりも願っていらっしゃいます。

そして、主神は、明主様と共におられて、私どもを支え、助けてくださりながら、日々私どもの心を耕し、手塩に掛けて育ててくださっています。

私どもを豊かな実りとして、すなわち、ご自身の子という豊かな実りとしてお受け取りになることを願っていらっしゃいます。

農作物を含めて、大自然を始めとする万物は、その主神の願いを宿し、その願いのために一生懸命お働きくださっています。

ですから、私どもが主神の願いにお応えさせていただくためには、“メシアとして新しくお生まれになった明主様がわたしの意識の中心にいらっしゃいます、”と認め、“明主様と共にあるメシアの御名にあって、すべてのものと共に天国に立ち返らせていただきます、”という思い、想念を主神に捧げさせていただく必要があると思います。

先程は、皆様を代表して、〇〇さんが感謝奉告をご発表になりましたが、お話をお伺いする中で、神様は、大きな愛をもって、すべての人のありのままの姿をご覧になり、様々な心の声や思いをお聞きくださり、すべてをご自身の浄霊の光によって赦し、救い、天国に迎え入れてくださっている、と思わせていただきました。

私どもは、知らず識らず、自分の価値を高めるために生き、お互いに自分の持つ善悪の尺度をもって、相手を裁き、時には自分を裁き、相争ってまいりました。

大小様々な形の戦争から、家族内の衝突に至るまで、争いに巻き込まれたり、自らが争いの種を蒔いたりして生きてまいりました。

その一方、私どもは、人間同士が相争うことをやめ、お互いの和を尊重することにも取り組んでまいりました。

しかしながら、私どもは、こうした私ども人間同士の和のことは考えますが、私ども人間と神様との和について考えたことがあるでしょうか。

明主様は、お歌に、「国と国人と人との涯はてもなき争いさかひ止むるは神の外ほかなき」とお詠みになりました。

このお歌を通して、私は、いかに人間が知恵、想い、努力を尽くしても、人間の力ではいかなる和をも生み出すことはできないのだという、明主様からの厳しいメッセージが込められていると思わせていただきました。

そして、私どもにとって最も大切な和とは、私ども人類と神様との和であり、神様との和があってこそ、人間同士の和が許されることを忘れていたことに気づかせていただきました。

神様との和とは、神様の愛を知ることです。

私ども人類は、この神様の愛を知るために生まれてきました。

神様の愛を知って、神様の子供として新しく生まれるために生まれてきました。

なぜならば、神様は、私どもの魂の親であるからです。

神様は、私どもを、私どもの原点である天国においてお生みになる時に、ご自身の息と共に、ご自身のすべてを私どもに分け与えてくださいました。

神様は私どもを、一人残らず、ご自身の愛に結んでくださったのです。

しかしながら、私ども人類は、神様の愛を知らずに生きてまいりました。

私どもは、天国が自分の原点であることを忘れ、神様が魂の親であることを忘れ、神様の愛から離れた存在になっておりました。

私どもは、私どもの無知のゆえに、長い間ずっと神様と争っている姿だったのではないのでしょうか。

そんな私どもであっても、私どもを限りなく愛してくださっている神様は、夜昼転換をもって私ども人類を赦してくださり、私どもとの和を回復してくださったのです。

本日は、祭典の最後に私ども一同で「偉大なる御光」という曲を歌わせていただくことになっております。

この曲は、今から51年前の昭和40(1965)年、ブラジル宣教本部の発足に際し、現地ブラジルの信徒によって作詞作曲され、日本では、その年の明主様の御生誕祭の奉納演芸の中で、初めて披露されました。そして、現在に至るまでの長い間、日本を含め、世界のいろいろな国々の信徒によって、祭典行事などの折に歌われております。この歌は、全世界の多くの信徒にとって大切な歌であります。

その日本語の歌詞の中に「神の愛に結ばん」という言葉があります。

神様は今、「わたしの愛に結ばん」と仰って、全世界を、全人類を、再び

ご自身の愛に結んだことを私どもに告げ知らせてくださっております。

ですから、私どもは、一人ひとり、自分自身が神様の愛をないがしろにし、神様の愛から離れ、神様と争っていた姿であったことに気づくと同時に、神様が和を回復してくださったことを認めさせていただく必要があると思います。

神様ご自身が、私どもを赦してくださり、和を回復してくださったのです。

私どもは、神様の愛に結ばれていないのではなく、結ばれているのです。

私どもは、神様の大きいなる愛による赦しによって、神様との和が回復された喜びをもって、この「偉大なる御光」という歌を、大きな声で力いっぱい歌わせていただきたいと思います。

終わりに、春の息吹がすべてを甦らせるように、主神が永遠の命の息をもって私どもをご自身の天国に迎え入れ、甦らせてくださっておりますことを、明主様と共にあるメシアの御名にあって、主神に心から感謝申し上げ、全人類とその父母先祖の方々と共に、そして、万物と共に、吸う息吐く息のうちに、新しく生きるものとならせていただきますよう。

ありがとうございました。

以 上